

明治25年には、輪西・岩見沢間に鉄道が敷設され、登別駅が設置されました。これにより来泉客が増え、次々と旅館が開業しました。

明治31年、滝本金蔵は内湯に『不老泉』と称した明ばん泉を引き、さらにクスリサンベツ川沿いに『滝の湯』『塩の湯』『万寿湯』の温泉場を設けました。滝の湯は登別パラダイスの場所にあります。

これらの湯に、湯治客が旅館から浴衣姿で通う様子は、温泉情緒たっぷりの人気を博していました。

滝本金蔵は、終生を湯守としてささげ登別温泉の発展に献身し、今日の登別温泉繁栄の基礎を築いていきました。

明治32年に滝本金蔵が亡くなり、明治末期から大正初期にかけて第一滝本館を経営したのは、栗林商会を築いた道議会議員の栗林五朔でした。

栗林五朔は、登別駅と登別温泉を結ぶ軌道の敷設を計画し、大正4年に馬車鉄道を走らせ、このころから登別温泉は、利用者への気配りが整い、湯治場と呼ばれるようになりました。

第一次世界大戦後の登別温泉

栗林五朔は、大正8年に温泉事業の多角経営に着手。旅館経営や大浴場、遊園地、電灯事業、分湯事業などの事業を次々と行い、観光地登別の基礎を築いていきました。

しかし、第一次世界大戦が終わった大正7年以後は金融恐慌に陥り、それまで湯治客でにぎわっていた温泉街にも不況の影響が出始めました。そんな中でも栗林五朔の事業により、大正11年春から湯治客が増え始め、馬車鉄道の乗客に無料入浴券の配布や運賃の割引などのサービスに努め、受け入れ側の登別温泉では桜の大樹に電飾灯を点滅させるなど湯治客の歓迎に努めました。

これらの取り組みにより、湯治客が年々増え登別温泉の名声が一段と高まる中、情緒と潤いのある登別温泉の評価を高めようと、大正12年登別温泉名物踊りが作られています。

また、昭和5年には、室蘭毎日新聞社が募集した『登別温泉小唄』や『登別小唄』がラジオで全国放送され、その哀調を帯びた中にも温泉情緒が漂うメロディが反響を呼んで、一躍有名になったことも登別温泉発展の一助になっています。

花のトンネルが完成

昭和9年、皇太子ご誕生を記念し、登別から登別温泉までの沿道に千本の桜が植樹されました。近年は道路の拡幅による移植や補植などで桜の保存に努めているほか、登別市観光ホスピタリティ推進協議会などが桜や宿根草の植栽を行うなど、登別温泉へのウエルカムロードの形成に取り組んでいます。



▲大正4年当時の『馬車鉄道』

登別温泉小唄

ハー

名どこ湯どころ

可愛の花が

ぬれて咲きます

咲いて色ます

情どこ

お湯はとろろん

とんとろり

のぼる湯煙り

登別



▲登別温泉地獄谷

登別温泉地獄谷

数万年前から大規模な火砕流を伴う噴火を繰り返していたクッタラ火山。登別温泉地獄谷と大湯沼は、日和山の生成に続いて起こった爆発によって、開いた爆裂火口だと言われています。

登別温泉地獄谷には、15の地獄が存在し、その面積は約11畝にも及びます。

大湯沼東壁の道道倶多楽湖公園線沿いには、水蒸気爆発による堆積物が見られ、その堆積の様子からこれまで数百年から千数百年ごとに8回の爆発が確認されています。

登別温泉地獄谷鉄泉池の北東側に広がる千畳敷と呼ばれるところにあつた間欠泉は、明治18年ころには1時間に7・8回、6〜9mの高さまで熱湯を吹き上げていました。明治21年夏に突然活動を休止し、翌年に再び活動を始めましたが、次第に衰え明治34年ころにその活動を休止たとされています。

確認されている登別温泉地獄谷の最近の爆発は、約200年前に地獄谷中心部から小規模な水蒸気爆発が起きたことが、噴出物の調査で分かっています。

登別温泉は、このクッタラ火山の地獄谷からわき出でる1日1万トと言われる豊富な温泉とともに発展してきました。